



大人が絵本を 第56回 みんなで振り返る



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

平成の遺産「スマホ」「タブレット端末」

令和時代が幕を開けて1か月が経ち、記念イベントや限定品の発売など、新時代の祝賀ムードはまだまだ続き、令和元年は新天皇即位と改元熱気の冷めない一年となりそうです。

幕を下ろした平成時代を振り返って大きく変化したこととは、スマートフォンやiPadなどタブレット端末の登場による生活形態ではないでしょうか。手元の電子端末で買い物が完結し、飲食店に病院の予約、旅行の手続き、果ては、人と顔を合わせなくてもできるグループ内での会話まで、ひとところに居ながらにして、何でもできる社会となりました。それだけではなく外出時には、タブレットひとつあれば現金を持たずとも、公共交通機関の利用も、ショッピングも、目的地ナビだって、読書だって自在なのです。

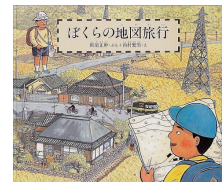
生活が便利になった一方で、大事なことが失われているか、懸念もあります。身体と心が未分化にある子どもたちには、便利な時代の、便利なものに頼りきりにならず、身体と脳の健全な発達を支えるアナログ文化との上手な使い分けを大人が示していかなければなりません。昭和時代には予想すらできなかった電子機器の進化と、ネット環境の飛躍的な発展を平成の30年で遂げたことは目を見張りますが、その対面上にある弊害にも目を向ける必要があります。

さて、進展を遂げたのは何も電子メディアばかりではありません。紙のメディアである絵本だって、「紙」ならではの進化を成し、電子メディアに負けない変化をみせているのです。皆さまの生活に当たり前にある絵本が、平成時代に残した足跡をたどってみましょう。

平成生まれのロングセラー

昭和時代の最終年となった昭和64年は、1週間ぼっきりで終わってしまい、1989年は松の内が明けると「平成」時代に入りました。平成になってすぐに生まれた絵本は、スマホも携帯電話もない時代に小学生が2人で、地図と磁石だけを頼りに隣町の灯台を目指して探検に出る『ぼくらの地図旅行』です。平成元年1月31日初版の本書の作者は、『ズッコケ三人組』シリーズが瞬く間に大人気となった児童文学作家の那須正幹氏と、ページいっぱい細かなたくさんの人やものを描いて、見る者に観察の楽しさを与える画風が特徴の西村繁男氏です。時代の移り変わりにふさわしい、昭和と平成を結ぶ旅と地図の物語です。

『ぼくらの地図旅行』
那須正幹 作
西村繁男 絵
(福音館書店)



6月には、今では絶大なファン層が付き、ますます人気の高まる『こんとあき』(林 明子作)が発行されます。それから、小さな子ども向けしかけ絵本の仕掛け人である木村裕一作『ひとりであんちできるかな』も、この年の11月に出版された一冊です。つまり、いずれも今年、発行から30周年を迎える絵本にして、押しも押されぬロングセラーというわけです。

平成時代の赤ちゃんとママを虜にした「あかちゃんのおそびえほん」シリーズの1作目となった『いないいないばああそび』が昭和63(1988)年12月に刊行されると、以降のシリーズは平成時代に出版されました。2作目の『ひとりであんちできるかな』は、平成の30年間で163万部を発行するミリオンセラーに成

手にするときは！

平成ヒストリー

企画 濱野 良彦
構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

長したのです¹⁾。平成生まれの子どもたちに限定的に愛用されているにもかかわらず、数多ある昭和生まれの絵本と肩を並べている驚異の人気ものです。

また、ダイナミックでエキゾチックな独特の色彩あふれる画を描くスズキコージ氏は、同年12月に大人向けの絵本『ハンガリアン狂詩曲』を出版しました。スズキ氏は、それまでの絵本からみると型破りで意表を突く作品を排出し、新たな境地を生み出した作家です。この大人向け絵本は、絵本作家デビュー17年目の作品に当たり、以後次々と、前衛的な世界観を描き出し、正に平成の絵本界に強い影響を与えました。

絵本界に、時代の参入者あらわる

平成時代となる前の20年は、日本に絵本ブームが訪れたときです。戦後の復興期を終え、大学紛争など管理社会への批判と、自立社会への活動が活発になった時代を超えた1970年頃、日本の作家が次々と出現し、みるみるうちに日本の絵本が増産されて、絵本文化が定着していくのです。国内で絵本文化がその地位を確立した頃、時代は平成に突入し、時代の移ろいと共に、絵本もまた変遷をみせます。

絵本の世界に、現代美術画家やアニメーション作家、グラフィック・デザイナー、イラストレーターなど他分野の専門家が参入するようになり、「絵本はアート」の時代と呼ばれるようになります²⁾。それが、1990年代のことです。

その代表とも言える作家は、わがビブリオキッズの総合プロデューサーである駒形克己氏で、グラフィック・デザイナーの技術を駆使した赤ちゃん絵本「Little eyes」シリーズ全10巻を、1990～92年の3年のうちに発表しました。

「Little eyes」シリーズ
駒形克己 作
(偕成社)



生後3か月くらいの子どもは、コントラストの強い色に反応するという発見から、『First Look』などのカード形式の絵本を発行して以降、『Blue to Blue』のような紙の素材と色にこだわった作品や、『土のなかには』にみられるスパイラル式のしかけ絵本など、従来の本の形態にとらわれない作品を制作するのです。本連載のあちらこちらに登場するペンギンキャラクターのデザイナーでもある駒形氏は、絵本のコミュニケーション性に着目し、色、形、大きさ、素材にこだわりながら、新感覚の絵本を作り続けている、自称「造本作家」なのです。

絵本はアート

「絵本はアート」時代の突破口を開いたのは、美術専攻から絵本界に参入した中川素子氏で、1991年に発行した著書『絵本はアート—ひらかれた絵本論をめざして』において、絵本の視覚表現の重要性を提言しました。それは、従来論じられてきた児童文学や教育的な絵本観から、美術的な視点での絵本観への切り口で、中川氏のこの異議によって絵本の世界は大きな転換期を迎えることになりました²⁾。現代の絵本研究においては多角的視点の重要な一辺となっている「視覚表現」が重視され始めたのは、平成初期のことなのです。

「絵本はアート」の切り口は、後の2011年にわが国で発行された、世界で初めての絵本事典となる『絵本の事典』(朝倉書店)で、「絵本を美術、アート



の視点から読み解いていく方向は、この著者以降、次第に市民権を得るようになった³⁾と評されるほど、日本の絵本界に斬新で大きな一石を投じることになりました。

「大人こそ絵本」の時代

「大人の絵本」に目が向き始めたのも、平成時代です。アメリカの哲学者が書いた絵本が、1998年に『葉っぱのフレディ』という日本語訳タイトルで出版されると、「大人向けの絵本」とした論評が飛び交い、瞬く間にベストセラーとなりました。

『葉っぱのフレディーいのちの旅』
レオ・バスカーリア 作
みらいな 訳
(童話屋)



また、ドキュメンタリー作家の柳田邦男氏が、「大人こそ絵本を」と提唱し始めたのも1990年代後半です⁴⁾。歴史的には、大人を対象として創生した絵本ですが、時代や生活の流れの中で、いつしか「絵本は子どものもの」と、取って代えられてしまいました。しかし、生活が豊かになり、社会がめまぐるしく進展する世の中になると、心身を疲弊する大人が増加したことも相まって、改めて「大人の絵本」に目が向けられるようになりました。「癒し」という時代のキーワードが生まれたことと同時に、絵本に「癒し」を求める大人が現れ出したのです³⁾。

時代が求めた「読書の力」「絵本の力」

平成時代が10年を過ぎたとき、21世紀が訪れ、世界中がミレニアムイヤーの祝賀モードに包まれました。日本では、子どもの読書推進事業が活発になっていきます。「読書の力」が人間の成長・発達に大きく影響することが認識され始めるのです。21世紀元年の2000(平成12)年は「子ども読書年」とされ、様々な読書推進活動が行われました。子ども読書年

を機に、2001年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布され、義務教育において読書教育の充実が求められるようになります。今では、学校教育の根幹となっている「朝読」活動のすそ野が広がっていくのも、平成13年以降です。

学校教育現場で読書活動の推進が求められたのが、平成時代も半ばのことですから、小児医療の現場で絵本が重要視されてこなかった経緯も納得できます。教育現場におけるこの動向は、平成の世の中に、絵本の価値観を大きく変容させることとなり、そして、医療界も続くのです。

ブックスタートがはじまると…

「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布された同年の2001(平成13)年、絵本の歴史において一大トピックとなるブックスタートが始まりました。1992年にイギリスで始まった、赤ちゃんとその保護者に絵本を手渡す運動の導入は時流に乗り、絵本ブームが再来するのです。

ブックスタートは、赤ちゃん絵本の隆盛を呼び起こすことになりました。ミリオンセラー不動の1位にいる『いないいないばあ』は昭和40年代に登場しましたが、0歳の赤ちゃんに絵本を読む文化はなかなか浸透されていきませんでした。良い作品が出ないという出版事情による理由もあったのです³⁾。ところが、ブックスタートは予想外の成果をあげ、「抽象的な絵とともにことばのリズムや語感を楽しむ³⁾絵本の創作に、名立たる絵本作家である谷川俊太郎氏、長 新太氏、元永定正氏が手掛けることとなり、赤ちゃん絵本の文化が根付くことになったのです。

絵本はメディア

「絵本はアート」の時代を超えて、2000年代になると「絵本はメディア」の時代となりました。絵本がメディアであることは、1953年にリリアン・H・スミスがア

アメリカ図書館協会より出版した『The Unreluctant Years』で論じられており、1964(昭和39)年に日本語翻訳書『児童文学論』⁵⁾が刊行されて以降、国内の出版文化産業界では定説となっていました。ところが、時代の流れとともに「メディア」というものの意味合いそのものが変わりゆき、絵本のもつメディア性もまた変わっていったのです。日本女子大学家政学部教授で、絵本学会理事の石井光恵氏は、「メディア」が「昔のマスメディアから、自分たちの関心のあることを個人がアップするメディアへと変わっている」社会環境に着目して、「絵本を見る際、個々の人たちのメディアとした視点が欠かせない」と述べています⁶⁾。昭和時代と比べ、情報環境も電子機器環境も大きく変化した現代におけるメディアとしての絵本の捉え方も変容しているということなのです。

さらに石井氏は、SNS隆盛の社会において「コミュニケーションツールの質の変化は、絵本と読者の関係性にも影響を及ぼしている」と指摘し、「絵本として完成しているものを読者が読むのではなく、読者も絵本に関わって絵本が完成するスタイルが好まれるようになった」と分析しています⁶⁾。これこそが、紙のメディアである絵本の進化なのです。

次世代のロングセラーはこれだ！！

2008(平成20)年に登場した、いわいとしお作『100かいだてのいえ』を見てみましょう。ページは従来の右開きや左開きではなく、縦長サイズの絵本を下に開くスタイルで、しかし、物語は読み手とともに上へ上へと進んでいきます。その仕掛けだけで驚き満載ですし、「次のページ(階)は？」と好奇心は高まる一方です。読者がページをめくって、自ら階段を登りながら歩を進めることで物語が形作られていく、このインタラクティブな絵本こそ、現代の「絵本はメディア」そのものなのです。

シリーズは、「ちか100かい」「うみ100かい」「そら100かい」と続き、上に下にと各階を観察しながら

100階まで到達する過程での、作者との双方向性の仕掛けが、子どもにも大人にも人気を博している理由でしょう。第1作の初版が平成20年に刊行されてから、わずか10年でシリーズ累計300万部を発行しているのです。現代のメディアを象徴する絵本でしょう。

絵本は癒し

「絵本はメッセージ」、「絵本は商品」の時代であった昭和から、平成時代は30年の間に「絵本はアート」、そして「絵本はメディア」へと進化を遂げました⁷⁾。

携帯電話とインターネットが急速に普及した平成は、天災と紛争の時代でもあり、多くの尊いのが奪われ、人々は心身ともに窮地に追い込まれました。このような時代の中で、大人も子どもも絵本に癒しやぬくもり、いのちのつながりを求めたように思います。これらのキーワードは、「絵本はメディア」の時代を超えて令和時代の絵本の特性となるのではないのでしょうか。

時代がどんなに変わっても、絵本は私たちの生活に寄り添うツールであり続けることでしょう。とりわけ、医療の現場においては、昭和・平成時代には予想もできなかった新しい力の出現が期待されます。



文献

- 1) トーハン：ミリオンぶっく2019, トーハン, 東京, 2019.
- 2) 中川素子：絵本はアート, 教育出版センター, 東京, 1991.
- 3) 石井光恵, 他：絵本の事典, 朝倉書店, 東京, 2011, p.182.
- 4) 柳田邦男：大人が絵本に涙するとき, 平凡社, 東京, 2006, pp.14-17.
- 5) リリアン・H・スミス著, 石井桃子, 瀬田貞二, 渡辺茂男訳：児童文学論, 岩波書店, 東京, 1964, pp.203-233.
- 6) 石井光恵：絵本を一冊まるごとウォッチング, 国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座講義録平成29年度, p.15-30, 2018.
- 7) 石井光恵：絵本を学ぶ, その序章から—絵本とは何か, 国際子ども図書館HP <http://www.kodomo.go.jp>